

愁いの季

『新壘』
32-1号

倅を喚ぶ風にまぎれゆくこの道の断たれし後の愁は思はず

喪はれゆくものへの愛着のごと陽は耀やきて晩秋を彩る

昏れて尚温みを残す季は^{かは}渝り易きころ謐かにあらむ

かなしみの還るが如く風が吹き荒ぶ背向けて吾が受くるに
非ず

この穹の続く限りは衛られていむ我も和みのごと冬の季

雪道

『新墾』
32-3号

吹く口笛より織き肩の少年が不意に避けくれし雪昏らき
道

降る雪に消されて定かならざりし道があり吾が一世もか
く歩まむに

鋭利に光る夜の灯を求めつつ来りて長く貧しさつゝのらす

吹く風にも脆き吾を励りて潤む瞳を持つ少年 父祖を継
がざり

水蜘蛛の這ふさま灯の中に見ていつ吾がひそむ残忍性愉し
く懼れむ

汝が見する笑いの中に吸はれゆきて脆き吾と自ら賤しむ

冬・雪

『新壑』
32-4号

掌型の雲重く吾が頭上に垂れ何を捉らへんとす街は大雪

雪の日が続くその事よりも暗く吾が感情あり何故とも識
らず

雪降りてあまたの汚濁覆はるゝ点滅はげしき灯の中くごり
来て

織^{ほそ}りたる指を冬の雨に打たせをり独りを託つことも巧みと
なる

弛みたる指輪指を廻りつゝ常に渝りたる位置をしめせり

顔ち合ふ程の歎びもなく過ぎて来し没日にさらす肩頼に
怒りて

播かれし種子の結実の期よ埋もれている吾が倅し還るがごと
し

ひそくと聳きおらむ吾の事等も葬いて夥しく紫陽花の
散る

あばかるゝもの何もなしと云いきれずこの脆さに似たる淡き
夕映え

血縁を秘かに疎む吾の髪を湿らせてこの雨期もとみになが
し

会うために落けし花故優しからむ悉く棘の抜かれし夏の
紅薔薇

明日がいかに展かれゆくともこの刻を惜しみぬ暮れおそき夕
映えの中

忍後の形やゝ緩みゆく日々風に揺れいるコスモスと吾が佇つ

も
暮れて尚陽の温み残りし野に歩みゆたかに溢れむ吾が慕情

す
帰り来て拒める如き閉ざす扉に吾が掌のぬくみしづかに移

る
色づけば甦り来る愛しみかなつかまどに沁むる如き陽のふ

べし
寂しさより逃れむと目とずればなつかまど夜も色づきゆく

トーン
幾匹かの蠅打ちて心足りしか部屋より洩るゝ少年のバリ

らかせ
ふつくと何を希いて煮つめゆく葡萄ジャムは血色の液を滴

無数に飛ぶ蠅を目に追いつめて育たざりしかつての愛を慈
しむ

なつかまど

『新壘』
32-12号

諍ふ程の気力もなくて疲るゝ夕べどの道も消されて枯葉散
る

過ぎゆきて淡れむ愛しみなるべしなつかまどこの季まぎれ
なく色づく

帰り来て触るゝものゝ冷たかり母と云ふ名に徹し得ぬこの
身に

柔軟に風に揺れいるコスモスを見て佇つ献身に心溢れし朝

掴み得て長くつゞかざりし倅のため禱らむことも虚し花の
季

背かるとも背くことのなき日々劬りもあらず北の風吹く

責め合ひてむしろ寂しき互の影うつして暗き夜の壁あり